

私の国民学校時代

久貝 貞子 (SA 13期 大阪市 SA)

日本中がサッカー熱につつまれている時、突然の電話 戦争中疎開学童時代の事で書いてほしいとの事。半世紀以上も前のこととて、いいわよと、安受け合はしたものの、少々心配になり、されど疎開時代の事は部分的ではあるが、強烈に記憶しているものもあり、この際少しずつたぐっていく事に。

多分私は国民学校1年生で入学し、国民学校6年生で卒業した唯一の学年だったと思う。朝礼と称して毎朝運動場で軍歌の曲で何周も行進し、中央の一段高い朝礼台には軍服を身にまとった校長先生が直立不動の姿勢で敬礼され、前を通過するたびに足を高く上げて校長先生に向かって首を右に向けて行進したのが思い出される。



いよいよ国民学校3年生の終わり頃には戦争もはげしくなったのか、縁故疎開と称し親類(疎開中に藤井先生とおおえさん共に)縁者を頼って、クラスもぼつぼつ歯が抜ける状態になって来た。私もご多分にもれず、父方の親類に当たる所の離れに疎開する。... 志都美村という美しい名前の村だが、当時は見渡す限り田ん圃と山と、点在する部落であった。当時 近くには駅はなく、どこへ行くにも2キロは歩かねばならなかった。ただこの村には暴君で有名な武烈天皇の御陵があり広大な敷地に白鷺や、ごいさぎなどが群をなして飛んでいたのを見ることが出来た。また少し離れた所にはずっとせまい顕宗天皇の御陵などもあった。子供の足で30分位歩いて通う志都美国民

学校は二上山を背に生駒山脈に向かって歩き、帰りはその逆であった。校舎はもちろん木造二階建、雑巾がけをして、板張りの教室はピカピカだった。

学校から帰ると志都美神社の境内で電気が点くまで遊んでいたような気がする。しかし楽しい事ばかりでなく「疎開の子！疎開の子！」と上級(5・6年生)の生徒たちに苛められたこともよくあり、4年生~6年生卒業までは勉強と運動、唱歌など負けるものかと張り切ったものだった。

今思えば土地の子供は1年に何回かある農繁期には、家の手伝いで学校は二の次だったに違いない。都会から来たよそ者が威張っていたのは恥ずかしい事だったと。しかし 空気の良いところで住みよい、国民学校の生活だった。防空壕もなく、脱脂大豆をもとにした代用食を食しなくても良く。大阪市内の空襲時は夜、西の空がいつまでも赤く染まり、又 昼 青空の天高くB29の飛行編隊がキラキラと光っていたりで、子供心にそら恐るしくなったものである。

さて昭和20年8月15日終戦、この日を期に本当に日本中が大変な混乱期に入ったようである。復員の兵隊さんや都会の人達が闇市で雑炊などで空腹を満たしていたり等、耳にするようになった。そうそう 南のそごう百貨店はアメリカの進駐軍に接収されその後長い間、さみしい心齋橋になったものだった。

戦後 再建日本に向かって大変な気苦労だった事であったと思う。 現在七十数歳以上の方々は、ハングリー精神で頑張っただけで、その後の日本の繁栄を築いてこられたと思う。現在の若者達には実感していただけないかも知れないが。

その後、初めて文部省が決めた新制中学、新制高校と続くが、又いつか機会を見て。 昔々のたわ言とおぼしめして。 ペンをおくことに。
